

別紙様		令和4年度 学校評価表				(最終)				学校名 三原市立沼田西小学校				校番(13) 【資料3】			
式1		「自ら伸びる」児童の育成 ～わくわく登校、満足下校～		b 経営理念 ミッション・ビジョン		【ミッション】(自校の使命) 自分を愛し、夢を語る児童の育成 【ビジョン】(自校の将来像) 夢や目標に向かって、自ら伸びようとする児童を育成する学校 【育成を目指す資質・能力】○知識及び技能 ○思考力・表現力 ○主体性											
		評価計画				自己評価				改善策				学校関係者評価			
e 中期経営目標	d 短期経営目標	e 目標達成のための方策	f 評価項目・指標	g 目標値	10月		2月		i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析		改善策		評価		コメント
					h 達成率	h 達成率	h 達成率	h 達成率			改善策	改善策	イ	ロ			
確かな学力の育成	○児童自らが目標や課題を設定して、その実現や解決に向け主体的に取り組む能力や意欲・態度を育成する。	○問いの設定に視点をあてた授業改善を行い、児童の思考力・表現力の育成を行う。	①教師の肯定的評価 (1)「児童の問いから始まる授業を行っている。」 (2)「児童に問いをもたせる工夫を行っている。」	(1)100% (2)80%	(1)88.9% (2)100%	(1)100% (2)100%	(1)100% (2)125%	(1)100% (2)113%	A	(1)も(2)も目標値を達成した。全体研修による目指す授業の共有と授業研究、「問い」に関わる校内研修の実施及び指導案作成、「問いの設定」を意識した日々の授業実践及び交流を行ったことなどが要因であると考えられる。 この結果から、校内研修を実施し、日々の授業に活かすことで、児童の問いから始まる授業を実践できていると考えられるため、更なる研究推進を図ってきたい。 教師の意識の向上だけでなく、児童側にも達成感をもたせることや取組を学力と結びつけたものにするのが課題である。	(1)も(2)も肯定的な解答が100%だったため、引き続き校内研修と、児童の実態に合った導入や問いづくり、児童への支援などの授業の工夫を行う。 今後は、教員が児童の問いから始まる授業を行おうという意識をもって授業を行うことはもちろん、児童自身に自分たちが解決したいことを考え、それを解決することができたという自信をもたせたい。さらに、単元末テストや学力調査などで良い結果を残せるよう、1時間の授業の充実と課題の分析と対策を引き続き行う。	イ	ロ	ハ	・「問い」に着目し、授業づくりが進められていることは、今日的課題を的確にとらえた取組であり、その研究・実践の成果に期待したい。 ・中学校に向け、自主的に自ら求めて学習を行うこと、特に、高学年の児童には、家庭での学習習慣の定着や効果的な学習方法の習得に向けた指導をお願いしたい。 ・「問い」から始める授業」問いを共有し、問いを解決できたという達成感が得られるような声掛けが、学習意欲につながり確かな学力になると思う。 ・校内研修の実施など先生方の努力姿勢意識が児童に反映されて、良い結果得られていると思う。 ・学力向上にむけて、目標値を設定し、地道に取り組まれていることがよくわかった。 ・全体研修による目指す授業の共有を授業研究を熱心に行っている事が伺えた。 ・児童が「問い」を解決しようとする姿が見られた。		
			○各学力調査に向けた対策や、算数科の思考力・判断力・表現力のテストの分析を通して、学力の向上を図る。	①全国学力・学習状況調査 全国平均値以上 ②標準学力調査 標準値+3ポイント ③単元末テスト 思考力・判断力・表現力等 学年平均通過率 80%以上	① 全国平均以上 ② 標準値+3P ③ 80%以上	84% 91% 91%	80% 95% 94%	112%	A	今回のアンケートでも、全ての項目で目標を達成することができた。 「クラスの友達と話し合って、問いを解決しようとしている。」については95%、「問題を解く際には、これまでに学んだことや経験したことを使おうとしている。」については94%の肯定的な回答を得られ、中間よりも上昇した。校内研修を通して授業改善を行い、前期よりも授業中に説明する機会を増やしたり、どのように説明すればよいか示したり、思考整理シートを用いて教員が意識して既習を取り扱ったりしたことが要因ではないかと考える。 一方で、「自分達で問いを作ることができている。」については目標値80%を達成してはいるものの、他の項目よりも低い数値である。児童自身に、「自分たちで考えた問いを解決することができた。」という達成感をもたせることに課題がある。	全ての項目で目標を達成することができたが、その中で低い数値だった「自分達で問いを作ることができている。」の項目について以下の改善策を行う。 ①児童と問いの共有の改善 児童に問いをもたせる際に、導入で感じさせた困り感やズレをクラスの全員で共有する。そうすることで「自分達で問いを作ることができた。」という自信をもち、学習意欲に繋がる。更に、児童全員がこの時間でどんな問いを解決すればよいか理解することで学習の理解度も高まると思える。 ②教師の価値づけ 児童が問いをつくれた際に肯定的に受け止めたり、授業の最後に問いを解決できたという達成感を得られるように声をかけたりし、児童に自力でできたという自信をもたせる。最後に問いを振り返ってまとめを行い、問いとまとめが繋がっていることで、児童に達成感を感じさせる。	イ	ロ	ハ	・「問い」に着目し、授業づくりが進められていることは、今日的課題を的確にとらえた取組であり、その研究・実践の成果に期待したい。 ・中学校に向け、自主的に自ら求めて学習を行うこと、特に、高学年の児童には、家庭での学習習慣の定着や効果的な学習方法の習得に向けた指導をお願いしたい。 ・「問い」から始める授業」問いを共有し、問いを解決できたという達成感が得られるような声掛けが、学習意欲につながり確かな学力になると思う。 ・校内研修の実施など先生方の努力姿勢意識が児童に反映されて、良い結果得られていると思う。 ・学力向上にむけて、目標値を設定し、地道に取り組まれていることがよくわかった。 ・全体研修による目指す授業の共有を授業研究を熱心に行っている事が伺えた。 ・児童が「問い」を解決しようとする姿が見られた。		
			○沼田西小学校「五つの宝」に取り組む。	○地域と連携し、地域の宝を生かした学び「沼田西学」を通して、児童の自己有用感、共感的な人間関係、規範意識を培う。	児童質問紙肯定的評価 (1)「自分のことが好き」 (2)「自分には相談できる人や助けてくれる人がいる」	90%	(1)72.6% (2)95.8%	(1)80.6% (2)95.7%	(1)89.5% (2)125%	(1)107%	A	全国学力・学習状況調査の本校の通過率は、国語科62%(全国65.6%)、算数科60%(全国63.2%)、理科66%(全国63.3%)だった。全国平均以上という目標の達成度は国語科95%、算数科95%、理科104%で、理科のみ達成した。 標準学力調査では、目標に設定していた標準値+3ポイント(結果未着のため昨年度全国平均と比較)を達成できた学年は、6学年中4学年(66.7%)となった。全国平均を50とすると、1年生は60.9、2年生は65.7、3年生は59、4年生は48.2、5年生は44.5、6年生は53.8だった。どの学年も復習が必要な領域があることが分かった。また、問題を読み取る力や、根拠を示して説明する力、短い時間でたくさん問題を解くことへの慣れも必要であることが分かった。 2学期の単元末テストでは、研究教科である算数科の思考力・判断力・表現力等の学校全体の平均通過率が81.8%で目標の80%を超えることができた。学年別にも、全ての学年が80%を超えることができた。更なる向上を目指すために、問題場面の読み取りや、小数や分数等を含む四則計算の技能面の課題の克服、低学力児童への支援を行う必要がある。	①学級会等で、自他の良さを見つけ合う活動・学習を仕組む。 ②学級全体の課題に対する取組と、個に焦点を当て、自分を好きになれない要因を分析し取り組む。 (2)地域への愛着を深めるために、以下のことに取り組む。 ①総合的な学習の時間や「生活科」の計画の中にある地域学習は、未実施のもの、改良したものを整理し次学年に引き継ぐ。 ②「発表参観日」等、発信する機会を有効に活用していく。	イ	ロ	ハ	・外遊びや授業にACPを積極的に取り入れていくことが、集団づくりや体力づくりにつながっており、すばらしい。 ・自他の良さを見つけ合う活動、学習は大変良い事だと思う。 ・「自分には相談できる人や助けてくれる人がいる」という項目が気になった。 ・目標は上回っており安心したが、友達作りが難しいと言われる現代、重要な項目だと思っている。
○友達や故郷を愛する心育てる。	○地域と連携し、地域の宝を生かした取組を推進し、郷土を愛する心や、地域の役に立ちたいという児童を育成する。	児童質問紙肯定的評価 ①「沼田西町のためになることをやってみよう」	90%	88%	89%	98%	B	①の教師アンケート及び②の児童アンケートは目標に達した。職員研修でアクティブ・チャイルド・プログラムに取り組み、実際に学級活動や体育科の学習の際に各学級で実践したり、体力向上に向けたサーキットトレーニングにも取り組んだことが要因であると考えられる。しかし、(2)「体を動かすこと(運動)が好きである。」と肯定的な回答をした児童の割合が下がった。寒くなってきたことも考えられるが、引き続き、児童会や体育委員会から遊びを提案し、学校全体で取り組む活動を取り入れていく。	運動に慣れたり楽しみなが体を動かすことができるよう、教職員と児童に対して引き続き以下の点に取り組む。 ①のびのび朝会で運動遊びの実施 「ドンじゃんけん」や「言うこといっしょ、やることいっしょ」など、全校でできる運動遊びを実施する。 ②ロング昼休みに縦割り班遊びに取り組む。 3学期は特に縦割り班で遊ぶよう、児童会や体育委員会を中心に実施していく。 ③校内研修の実施 学期に1度、アクティブ・チャイルド・プログラムの研修を行い、学期に1度は学級でアクティブ・チャイルド・プログラムを実施できるようにする。	イ	ロ	ハ	・体力テストの結果は目標値に届かずとも、すべてにおいて9月測定時より向上していることはよかったと思う。 ・アクティブタイムなど継続的に取り組むことは大切だと思う。 ・学力向上・体力向上などの目標達成のためには、家庭での取組も重要であり、引き続き保護者との連携を進めてほしい。 ・支持的風土のある学級集団作りをがんばっておられる事がわかった。 ・コロナ禍の中、工夫して地域への愛着を深める取組、感謝します。 ・9月よりどの学年も体力が向上している。 ・アクティブチャイルドプログラムの研修を行い各学級、全校朝会で熱心に取り組まれたことがわかった。さらに個で取り組む運動を取り入れたら体力向上につながると思う。				
豊かな心・健康な体の育成	○様々な人や事象との関わり合いを通して、豊かな人間性と健康な体を培う。	○外遊びや授業でのACP(アクティブ・チャイルド・プログラム)を動行するとともに、体育的な特別活動を工夫して行う。	①教師の肯定的評価 (1)「運動に慣れ、楽しみなが活動できる取組を取り入れている。」 ②児童質問紙肯定的評価 (1)「進んで外遊びをしたり体を動かしたりしている。」 (2)「体を動かすこと(運動)が好きである。」	①90% ②(1)80% (2)80%	①88.9% (1)83.2% (2)91% 平均 87.1%	①100% ②(1)87.1% (2)89% 平均 88.1%	①111% ②110% 111%	A	今年度から指標を「昨年度の学年平均値以上の児童の割合」としている。10月時点での評価同様、3つの測定項目ともに目標に及ばなかった。しかし、9月測定時に比べてどの項目もかなり向上している。また、各学年で低下した項目は1つもなかった。2学期から特に取組を加速してきたアクティブ・チャイルド・プログラムや、朝の会、帰りの会で1分程度グーパー運動や指ハイツ、レッグランジなどに取り組む運動(アクティブタイム)、週末に取り組む運動の宿題(週末プラス1)の成果であると考えられる。また、陸上の講師を招聘しての走り方講座も、体力向上の一因と考えられる。	体力向上(特に握力、50m走、長座体前屈)のために、引き続き以下の点に取り組む。 ①朝の会や帰りの会での「アクティブタイム」の導入 各学級で「グーパー運動」「指ハイツ」「レッグランジ」「柔軟」を1分間程度毎日取り組む。 ②週末プラス1(運動の宿題)の実施 夏休みや冬休みに行ったがんばりカードを、週末にも位置付けて取り組むことで、継続的に体力の向上を目指す。 ③アクティブ・チャイルド・プログラムやサーキットの導入 寒い時期でもあるため、体を温めることをねらいとして、体育科の学習の導入に位置付けていく。	イ	ロ	ハ	・体力テストの結果は目標値に届かずとも、すべてにおいて9月測定時より向上していることはよかったと思う。 ・アクティブタイムなど継続的に取り組むことは大切だと思う。 ・学力向上・体力向上などの目標達成のためには、家庭での取組も重要であり、引き続き保護者との連携を進めてほしい。 ・支持的風土のある学級集団作りをがんばっておられる事がわかった。 ・コロナ禍の中、工夫して地域への愛着を深める取組、感謝します。 ・9月よりどの学年も体力が向上している。 ・アクティブチャイルドプログラムの研修を行い各学級、全校朝会で熱心に取り組まれたことがわかった。さらに個で取り組む運動を取り入れたら体力向上につながると思う。			
	○健康で活力ある生活を送るための基礎を培う。	○体力テストで明らかになった課題解決に向けて、準備体操やサーキットトレーニングを見直し、走・握力・柔軟性の定期的測定を行う。	「50m走」「握力」「長座体前屈」の項目で、昨年度の学年平均値以上の児童の割合	80%	50m 36.9% 握力 39.8% 長座 38% 平均 38.2%	50m 62.6% 握力 60.6% 長座 54.4% 平均 59.2%	74%	C	今年度から指標を「昨年度の学年平均値以上の児童の割合」としている。10月時点での評価同様、3つの測定項目ともに目標に及ばなかった。しかし、9月測定時に比べてどの項目もかなり向上している。また、各学年で低下した項目は1つもなかった。2学期から特に取組を加速してきたアクティブ・チャイルド・プログラムや、朝の会、帰りの会で1分程度グーパー運動や指ハイツ、レッグランジなどに取り組む運動(アクティブタイム)、週末に取り組む運動の宿題(週末プラス1)の成果であると考えられる。また、陸上の講師を招聘しての走り方講座も、体力向上の一因と考えられる。	体力向上(特に握力、50m走、長座体前屈)のために、引き続き以下の点に取り組む。 ①朝の会や帰りの会での「アクティブタイム」の導入 各学級で「グーパー運動」「指ハイツ」「レッグランジ」「柔軟」を1分間程度毎日取り組む。 ②週末プラス1(運動の宿題)の実施 夏休みや冬休みに行ったがんばりカードを、週末にも位置付けて取り組むことで、継続的に体力の向上を目指す。 ③アクティブ・チャイルド・プログラムやサーキットの導入 寒い時期でもあるため、体を温めることをねらいとして、体育科の学習の導入に位置付けていく。	イ	ロ	ハ	・体力テストの結果は目標値に届かずとも、すべてにおいて9月測定時より向上していることはよかったと思う。 ・アクティブタイムなど継続的に取り組むことは大切だと思う。 ・学力向上・体力向上などの目標達成のためには、家庭での取組も重要であり、引き続き保護者との連携を進めてほしい。 ・支持的風土のある学級集団作りをがんばっておられる事がわかった。 ・コロナ禍の中、工夫して地域への愛着を深める取組、感謝します。 ・9月よりどの学年も体力が向上している。 ・アクティブチャイルドプログラムの研修を行い各学級、全校朝会で熱心に取り組まれたことがわかった。さらに個で取り組む運動を取り入れたら体力向上につながると思う。			
信頼される学校づくり	○協働的な学校運営を行う。	○年間計画表を指標として、主任の機能化と部会の活性化を図り、PDCAサイクルにより協働的な学校運営を行う。	教職員自己評価肯定的評価 (1)「2部会などの参加を通して協働的な学校運営に取り組んだ。」	100%	100%	100%	100%	A	教職員アンケート2部会などの参加を通して協働的な学校運営に取り組んだ」の肯定的評価は100%だった。各部において年間を見通した活動を示したことにより、教職員が意識的に協働的な学校運営に参画することができたといえる。さらに、来年度へつなげるよう、各部でのまとめを充実させていく。	①協働的な学校運営に情報の共有と見直しをもった取組は欠かせない。A評価になっているものの、引き続き業務内容の優先順位、ICT等を使用した視覚化・効率化などの視点から働き方改革を進めていく。 ②児童に関わる様々な業務への時間確保は確実に進んでおり、その時間が児童と向き合うことにつながっている実感を教職員自身が持てるよう、今後も継続して業務の効率化と内容の充実にも努めていく。また、年間を通して、1学期に勤務時間が長くなる傾向にあったので、来年度を見越した資料を年度内に作成しておくなど、年間を見通した取組を行っていく。	イ	ロ	ハ	・働き方に対する教職員の意識も醸成されてきており、在校時間の縮減にもつながっている。学校経営のすばらしさの現れだと思う。 ・多様な業務の中、業務の効率化、児童と向き合う時間の確保、教職員の皆様の日々の努力を高く評価したい。 ・数値化された「働き方改革の推進」という名のもと現場は大変な苦勞をされているのでは無いと思う。健康管理に充分注意していただきたい。 ・校長を中心に各主任が自覚をもち、協働的な学校運営に取り組まれ、児童に関わる業務への時間確保につながっていると伺えた。			
	○保護者の願いに応え、信頼される学校づくりを推進する。	○子供と向き合う時間を確保する。	①教職員自己評価肯定的評価 (1)「業務の効率化を図り、児童と向き合う時間の確保につなげた。」 ②教職員の間外在校時間平均43時間以内	①90% ②100%	①100% ②100%	①90% ②100%	①100% ②100%	100%	A	「業務の効率化を図り、児童と向き合う時間の確保につなげた」に対する肯定的評価は90%だった。また、10月から1月までの時間外在校時間平均43時間以内については、4か月平均が25時間であり、前期(29.5時間)より4時間減となった。退勤時刻を決め提示したり、声をかけたりすることで職員が時間を意識して勤務することができている。年間を延べ人数で見ると、4月から1月において5人/118人が、45時間(広島県「学校における働き方改革の推進」における目標値)を超えていた。4・5・6月に集中しており、年度始めの働き方に課題があることが分かった。来年度1学期において、さらに業務の効率化を図る必要がある。	①協働的な学校運営に情報の共有と見直しをもった取組は欠かせない。A評価になっているものの、引き続き業務内容の優先順位、ICT等を使用した視覚化・効率化などの視点から働き方改革を進めていく。 ②児童に関わる様々な業務への時間確保は確実に進んでおり、その時間が児童と向き合うことにつながっている実感を教職員自身が持てるよう、今後も継続して業務の効率化と内容の充実にも努めていく。また、年間を通して、1学期に勤務時間が長くなる傾向にあったので、来年度を見越した資料を年度内に作成しておくなど、年間を見通した取組を行っていく。	イ	ロ	ハ	・働き方に対する教職員の意識も醸成されてきており、在校時間の縮減にもつながっている。学校経営のすばらしさの現れだと思う。 ・多様な業務の中、業務の効率化、児童と向き合う時間の確保、教職員の皆様の日々の努力を高く評価したい。 ・数値化された「働き方改革の推進」という名のもと現場は大変な苦勞をされているのでは無いと思う。健康管理に充分注意していただきたい。 ・校長を中心に各主任が自覚をもち、協働的な学校運営に取り組まれ、児童に関わる業務への時間確保につながっていると伺えた。		

【:自己評価 評価】
A:100% (目標達成) B:80% (ほぼ達成) <100
C:60% (もう少し) <80 D:(できていない) <60

【:学校関係者評価 評価】
イ:自己評価は適正である。
ロ:自己評価は適正でない。
ハ:分からない。